

東京外国語学校魯語科とナロードニキ精神

——小島倉太郎の講義録をもとに——

渡 辺 雅 司

はじめに

中村光夫の名著『二葉亭四迷伝』を読む者は、明治10年代の東京外国語学校（以下外語と略記）魯語科の授業の水準の高さに驚かされることだろう。ロシアのギムナジウムとほぼ同一のカリキュラムで、授業はすべてロシア語。とりわけニコライ・グレイのロシア文学の講義にいたっては、教科書は一切用いず、生徒は名調子で朗読される文学作品にひたすら耳を傾け、しかるのち登場人物の性格描写を課されたというのだから⁽¹⁾。

ところでこれほど質の高い講義を受けながら、魯語科の生徒のなかからは、わが国の近代史に名を残すような人物がほとんど出なかったとはよく言われる。事実、明治期の歴史をひもとく時、そこに魯語科出身者の名を見ることは稀れである。それはなぜだろうか？

魯語科の生徒が能力的に劣っていたからなのか？あるいはまた、中村も言うように、学術語の習得を目的とした英仏独語と異なり、魯語科そのものが通訳や実業人の養成を目的としていた⁽²⁾からなのか？問題はそれほど単純ではない。じつは明治以降の他国に例のない急速な近代化への鋭い批判ともなり得るような重要な要因がそこにはあったと思われるのである。それを私はナロードニキ精神と名づけたい。予断的に言えば、日本におけるロシア学はそもそもナロードニキによってもたらされたのである。

知ってのとおりナロードニキ思想の根底には、ヨーロッパ近代への痛烈な批判がある⁽³⁾。そうである以上、日本にきたナロードニキにとって、脱亜入欧をめざす維新後の日本の姿は、民衆の覚醒という点ではある種の羨望をおぼえながらも、それ以上に将来における危機を予感させたに相違ない⁽⁴⁾。ではここで言うナロードニキとは誰れか？ほかでもない、これから述べようとする外語の魯人教師たちなのだ。こう考えていくと日本近代史のなかで埋もれたかに見え

る外語魯語科の生徒たちは、不肖の弟子どころか、むしろ師の思想と生きざまを真に理解し得た人たちではなかったか？こうした仮説を立証しようというのが本稿の目的である。

さて、ここに一つの興味ぶかい資料がある。すでに薄茶色に変色したA5版のノート三冊に、とても日本人のものとは思えぬ見事な筆蹟でびっしりと書きこまれた当時の外語魯語科の古代史、ロシア文学史、作詩法の講義録がそれである。筆記者は明治7年から14年まで外語に在学し、のちに開拓使通訳となった小島倉太郎⁽⁵⁾。時に綴りの誤りはあるものの、おおむね正確に筆記されているこのノートを、当時の外語関係の種々の史料とつき合せつつ解説していくと、上述の仮説を裏づける重要な事実が浮かびあがってくるのである。

1. 魯人教師の二つの系統

——亡命系と領事館系——

これらのノートを見て最初に気づくのは、同じ魯語科の講義ながら、その内容の学問的水準、教師の教育姿勢などからみて、格段に開きのある二種の記録が、歴史、文学について残っていることである。このことは、当時の外語に、教養、思想傾向、経歴が明らかに異なる二様の魯人教師がいたことを示している。これを仮りに亡命系と領事館系と表現しておこう。ちなみに私が調べ得たかぎりでの魯人教師の名を記せば、亡命系としてメーチニコフ→〈ボゴモーフ〉→コレンコ→グレイ、領事館系はトラクテンベルグ→コストゥイリョフ→〈ダニローヴィチ〉となる⁽⁶⁾。

ここで注目したいのは前者の亡命系教師である。亡命系教師の採用に関しては、多分に偶然の要素がはたらくものだが、ジュネーブ時代の大山巖の師ともいべきメーチニコフが外語に採用された⁽⁷⁾ことは幸いであった。目下のところ確証はないが、それ以後の亡命系教師はすべて、どこかでメーチニコフと繋がっていると私は予想している。なにも革命家だから良しとするのではない。彼らがみな言葉の真の意味におけるロシア・インテリゲンチヤだったからなのだ。メーチニコフがロシア思想史に名を残す第一級の思想家であったことは今や明白⁽⁸⁾だが、他の教師たちもそれにおとらずすぐれた個性の持主だったことが、講義録から窺えるのである。

亡命系教師の講義の特徴は、生徒の知的能力と精神的自立性をあくまでも信頼し、確固たる学問的方法に立って、時に10代半ばの生徒には難しすぎるかと思えるほどの最新かつ高度な情報を熱っぽく語りかけていることだろう。思え

ば200円という月俸⁹⁾は、亡命者にしてみればまさに僥倖だったはずである。そうした好遇を裏切るまいとする真摯な授業態度が、ノートからもひしひしと伝わってくる。何よりも極東の小国日本の“若きサムライ”たちを見下すところがないのがいい。

これに対し領事館系となると、おそらく自分の経歴に関係ないと思ったのか、相対的に高給（例えば函館領事館出仕のトラクテンベルグの月給は450円、なんと閣僚級の俸給である¹⁰⁾）を得ていたにもかかわらず、講義はもっぱら帝政主義、キリスト教主義の立場から、きわめて常識的事柄を伝達しているにすぎない。

このことが文部当局にも分ったのだろう、外語の職員録やお雇教師に関する史料によると、明治12年以降、領事館系の教師はまったく姿を消し、その後はアンドレイ・コレンコが一人で6年4カ月にわたり魯語科の講義を担当することになる。そして彼こそは、二葉亭四迷、嵯峨の舎御室（矢崎鎮四郎）、高須治助（『大尉の娘』の初訳者）らにロシア文学の最初の手ほどきをした人物であり、後述のとおり彼もまたナロードニキ系の青年教師だったのだ。

2. メーチニコフの古代史講義

まずは歴史の講義から見ていくことにしよう。最近メーチニコフの小伝を著したカルターシェワは、外語時代のメーチニコフについて、その『日本滞在記』をもとにこう書いている。「学生たちを相手にしたメーチニコフの授業はアカデミックな味気ないものではなかった。彼は単なるロシア語教師だったわけではない。メーチニコフはロシアの歴史、ロシアの文学、文化、ピョートル一世の改革活動、その生涯と時代について雄弁かつ熱っぽく語った¹¹⁾」と。またエリゼ・ルクリュは「彼（メーチニコフ）は持前の精力を発揮して、学校の組織化に取組み、日本の若き学徒たちの多大なる関心をひきつけることができた¹²⁾」と伝えている。メーチニコフ自身、日本への出立にさいし、ジュネーブで数学の教師資格を得ており、彼自筆の代数、幾何の教科書も残っている¹³⁾ので彼が数学を担当したことは確かだが、上の証言はさらに幅広い講義を行っていたことを予想させる。その一つが倉太郎のノートに残る古代史の講義だと私は確信する。

まず1875年という表紙の年号。無論この時メーチニコフは在職中である。つぎに歴史学を専門にする者ならではの方法論の確かさ、最新の学問的成果への通曉度、特にそれが古代史を扱っていることである。当時の外語のスタッフで

これだけの講義ができるのはメーチニコフ以外にない。かつて述べたとおり、メーチニコフは遺著となった『文明と歴史的大河』で、かのウィットフォーゲルを50年も先取りするような独創的な生態史観を展開し、彼と親交の深かったプレハーノフは、一説によるとマルクスよりもむしろこの書の歴史把握に着想を得て『史的一元論』や『ロシア社会思想史』を著したとさえ言われる⁴⁴。とりわけ専制とアナキーの問題、文明史における名もなき無告の民衆の復権、あるいはそれとパラレルなところで出てくる東洋文明の再評価、これが彼の歴史理論の特色である。そしてこれを立証すべくメーチニコフは水利体系とそれに規定された通商路、さらには民衆の世界観を反映する神話や土俗信仰へと着目していく⁴⁵。

ところが後のメーチニコフのこうした歴史観の萌芽が倉太郎のノートにはやくも垣間見られるのである。そもそもアラブ、トルコ語の勉強からアジアに注目し、みずからも中東諸国を流浪したことのあるメーチニコフにしてみれば、エジプト、バビロン、アッシリア、ギリシャの古代史はもっとも得意とする領域だったろう。

例えばエジプト史の項のつぎの言葉に注目してみよう。「民衆はおのが健康と財産を国家と神官のために犠牲にせねばならなかったと言えよう」この短かい引用からも分るように、歴代のファラオの偉業列伝式のエジプト史と異なり、メーチニコフの視線はつねに民衆に向けられている。このことはエジプトの宗教を論じた部分により顕著である。彼は支配宗教たる神官の宗教と民衆の宗教たる土俗信仰を峻別し、特に後者について動物崇拜などの事例をあげながら詳しく解説していく。それもそのはずで、この頃のメーチニコフは、歴史学におけるフォークロアやエトノロジーの重要性を説き、『デモニズムの文化的意義』なる先駆的な論文をナロードニキ系の雑誌に掲載していたのである⁴⁶。また日本に来る少し前、ゲルツェンの依頼によって、ロシアにおける土着的（これをさして彼は“ナショナルな”と呼ぶ）反国家思想の系譜を伝語版『コーロル』に連載していた⁴⁷ こともここでは想起したい。

こうしたメーチニコフの歴史観はバビロン、ギリシャについても貫ぬかれている。例えば古代ギリシャの奴隷制に触れてこう語る。「奴隷はその生まれからみて、しばしばその主人におとらず高貴であった。……各人を擁護するような社会法規はいまだなかったのである。万事が個人的感情と動機によってなされていたのだ」このように一般に民主政治の理想とされる古代ギリシャ社会の背後にも、人間的にすぐれた奴隷の存在を洞察させる史眼をメーチニコフの講

義は生徒に植えつけていたのである。

総じてメーチニコフの講義の特徴は、たとえその対象が古代史であっても、それを遠い過去のこととしてではなく、いわばそれが持つ同時代性を示すことによって、生徒の知的関心をひき出そうとすることにあった。バビロンの歴史は不明な部分が多いが、1843年以來つづいている英仏の共同発掘によって次第に真相が明らかになるとうの指摘や、エジプトのスフィンクスの多くがヨーロッパに持去られ、そのうちの二つはペテルブルクにある、などという情報は大きいに生徒の好奇心を唆ったにちがいない。

ここでメーチニコフと倉太郎の関係について数言。倉太郎の手帳には1875年にレオーノワという高名なオペラ歌手が来日した時の通訳を依頼するメーチニコフの手紙（10月26日付）の写しが残されている。また同じ手帳に残された帰国後のレオーノワの同行者からの返信（1876年7月21日付）の写しによると、この声楽家が日本で音楽学校を開く希望を抱いていたことが窺える。なぜこんなことを書くかという、1874年に舞台を捨てた花形歌手レオーノワの世界行脚もまた形をかえた“ヴ・ナロード”だったと思われるからなのだ¹⁸⁸。絵画における移動展覧派と同様、音楽の世界でも“ヴ・ナロード”が起っていたのであろう。そう考えればレオーノワがほかならぬメーチニコフと接触を持ったことも頷ける。そしてこうしたナロードニキ運動の広汎なうねりと意想外に近いところに外語の生徒たちが立っていたことは忘れてはならないだろう。

ではこれと比較される領事館系のトラクテンベルグの歴史講義はどのようなものだったか？これについては多言を要すまい。人類文明の発祥をメソポタミアに求めるのは良いが、その根拠を一切示すことなく、話は突如アダムとイヴのことに及ぶといった具合。またロシア建国の歴史は、さすがに多少詳しくなるが中味は歴代皇帝の列伝にすぎない。いやそれ以前の問題として、歴史を語る文体が稚拙かつ格調を欠くのだ。「性情懶惰」「到底其器ニ適セザル人物」¹⁸⁹なるが故に解雇されたのも当然だといえよう。

3. コレンコの文学講義

さてここで前述のアンドレイ・コレンコの文学講義に話題を転じよう。倉太郎のノートの半分以上を占めるこの講義がコレンコのものであることは、表紙にコレンコヴァ・ザピースカと記されているので間違いない。時に1879年、明治12年のことである。

作詩法とロシア文学史からなるこの講義は、おそらくわが国における最初の

系統だったロシア文学の紹介だったろう。そしてこの講義にもまた、われわれはナロードニキ精神の脈動をはっきりと見ることができるのである。ところでコレンコをナロードニキと呼ぶ以上、その経歴を紹介せねばなるまい。彼についてはもはやソ連本国でも知る人はないようだが、『革命家辞典』第二巻、70年代の部に概略つぎのような記述がある。「コレンコ、アンドレイ・アンドレーエヴィチ。1849年頃の生まれ……70年に学生紛争に参加，逮捕され，一月ほどペテロ・パウロ要塞に拘留。その後流刑，71年監視解除²⁰」この人物が外語のコレンコと同一人であることは，別の日本側の史料から割り出した年齢ともピタリと符号する²¹のでほぼ間違いない。

まず作詩法の講義。この講義の特徴は，ロシア詩のメトリカにおける音節と力点の関係をかなり高度に説きながらも，生徒自身がロシア語で自由に詩作できるようにとの実践的配慮がなされていることである。そのために語順組替の実例が示される。またロシア詩が力点中心になることの説明としてつぎのような詩を例示する。「友よ！今宵は大いに飲もう／酔えば俺にも歌がでる／だが明日は，帰る者となない土地へ／行くかも知れぬわが身なら／。」作者不詳のこの詩には，かつての革命青年コレンコの幾分ニヒルな心情が見事にでていないか！こうした詩を例にあげて講義を進める30歳の青年教師コレンコが，10代の少年たちにどのような思想的感化を及ぼしたかは想像に難くない。ちなみに当時の外語の時間割によると，各学年とも週2時間の暗誦時間が設けられていた。そしてそこでの教材の意味もあって，コレンコが編んだ選詩集こそ，彼のナロードニキ精神をいかに伝えていた。そこに収められた7篇の詩を列挙すれば，ルイレーエフの「あゝ！私はやりきれない」，ダヴィドフの「巡礼者」，ヴァーゼムスキーの「神よ！もし幸せがあるのなら」，オガリョーフの詩的“ヴ・ナロード”ともいうべき「居酒屋」，ポレジャーエフの「四つの民族」，デカブリストのオドエフスキーがプーシキンの「シベリヤへ」への返詩として送ったというあの「火花の中から炎が燃えあがる」という詩，さらに作者不詳ながら激烈にツァーリを呪った「双頭の鷲」となる。なんとすべて追放の詩人の作品ばかりなのだ！しかも原詩とは若干異同があるので，コレンコはこれらをすべて暗誦していたのであろう。

ひるがえって1879年のわが国を見れば，折しも薩長の藩閥政治が幅をきかし，中央集権的官僚機構が確立していく時にあたり，翌年には大久保利通が暗殺され，自由民権運動が各地で澎湃として起ってくる。そんななかでツァーリズムへの抵抗と民衆の怨念を歌った詩を口ずさむ魯語科の生徒の姿を想像してみ

欲しい。しかも薩摩出身者の多い仏語、長州出身者の多い独語とは対照的に、魯語科には薩長出身者は一名もないのだから²³。彼らはそれらの詩をわが事として歌っていたに相違ない。魯語科の生徒もまた時代のなかで余計者としてのコースを否応なく歩み始めていたのである。

であればこそなおのこと、余計者論を骨格としたコレンコのロシア文学史は、生徒たちの胸に響きかわすところ大きかったにちがいない。この講義は18世紀のロモノソフ、ヂェルジャーヴィンあたりからゴゴリまでを扱っている²⁴。ただなぜかプーシキン項が欠落しているが、これをもって60年代のピーサレフ的なプーシキン否定の影響をコレンコも受けていたのではと推理するのは早計である。ここで思い出さねばならぬのは、『まがらみ草紙』『めさまし草』に矢崎探美の名で嵯峨の舎が連載した「露国文学一斑」のつぎの言葉である。「然してカラムジン以後の文学は、露国のカンヂダウト（学位）アレクセイ、アレクセウキチ、コレンコ氏が曾て東京外国語学校に於て為し、講義の筆記に拠りて之を記せり²⁵」と。そしてそこでは、二段組みで7ページほどのプーシキン論が展開されているのである。

コレンコの文学史を語るとき忘れてならぬのは、通史と併行して代表的作品の朗読もなされていたことだろう。例えばこんな逸話が残っている。後に外交官となった川上俊彦が『罪と罰』の朗読後、読後感を課され、漢文調で「物を盗む者は賊となり、国を盗む者は王なり」と答えると、コレンコはにやっと笑って“ハラショー”の評価をつけたというのだ²⁶。つまり二葉亭が語り、中村光夫が強調するグレイの朗読方式の授業は実はコレンコから踏襲したものなのである。また文学史の講義の参考書としては、当時の外語の蔵書（一橋大学蔵）から判断するに、ボレヴォイの「ロシア文学史」とストユーニンの「ロシア文学教授」があげられる²⁷。

コレンコのロシア文学史の詳しい内容については別の機会に譲ることにし、ここでは講義の特色となる点を列挙するにとどめよう。まず第一に、文学における社会性の強調というベリンスキー的文芸批評の方法があげられる。文学作品がどのように同時代の現実を再現しているか、あるいはまた作品がいかなる啓蒙作用を持ったかということが指摘される。つまりコレンコは文学作品をとおしてロシア社会の現実を何よりも語っているのである。これは70年代というナロードニキ時代の子としては当然だともいえよう。

第二に、だからといって講義内容が公式的になることはなく、各作家の気質と生きざま、主人公の心理の動きをきめ細かく分析し、人間としていかに生き

るかということ語りかけていく。特にレーンモントフ論では、『死の天使』、『現代の英雄』、『デーモン』、『商人カラーシニコフの歌』などの作品をあげ、その内容を紹介すると同時に、激しい情念と高潔なる理想を持った余計者の悲劇、とりわけ卑俗な社会を前にした主人公の愛とエゴイズムの問題を鋭く切開きしてみせる。

第三に文学における諷刺やユーモアのもつ意味をヂェルジャーヴィン、ナレージヌイ、グリボエードフ、ゴゴリを例にとって説明している。特にチャーツキーにおける“知恵の悲しみ”やゴゴリの“涙をとおした笑い”の意味を説くくんだり⁸⁴は、生徒たちの胸に痛いほど突きささっただろう。

第四に、今日あまりかえりみられることのないナレージヌイ、ザゴースキン、ブルガーリン、センコフスキーなどについても、その作品的価値は低いが、大衆作家、ジャーナリストとして文学の大衆化をはかった功績をそれなりに評価する。瑣末なことかも知れないが、マルリンスキーの凝った文体ゆえに“マルリンスキー的文体”なる表現が流行ったとか、「この」を意味する指示代名詞をセイからエータットに代えたのはブランベウス男爵ことセンコフスキーだという指摘もわれわれには興味ぶかい。

なお文学の大衆化との関連でいうと、コレンコは歴史小説以外の現代文学については言文一致の提唱者であり、文語的表現はむしろ作品の文学的価値を貶めるものだと何か所かで指摘しているのは、二葉亭への影響を考えるうえで注目していいだろう。後に二葉亭は『余が言文一致の由来』で、逍遙のすすめで円朝の人情噺を真似たまでだと言っている⁸⁵が、仮りにそれが事実だとしても、四年間におよぶコレンコの授業のなかで知らず知らずそうした素地が出来あがっていたと考えることも可能だろうから。それはさておき、『予が半生の懺悔』で二葉亭が「私のは、普通の文学者的に文学を愛好したんじゃない。寧ろロシアの文学者が取扱ふ問題、即ち社会現象……を文学上から観察し、解剖し、予見したりするのが非常に趣味あることゝなった⁸⁶」と言うとき、そこにコレンコの文学観の影響の跡を見ることは容易である。この点グレイの影響だけを強調する中村光夫の所論⁸⁷は片手落ちである。なぜなら二葉亭はグレイにはわずか一年しか学んでいない⁸⁸のだから。

では日本のロシア学にとって恩人ともいふべきこのコレンコはその後どうなったのか？日露両国にとって不幸なことに、なんと彼は1930年代のはじめに非業の死を遂げたらしい。それも革命後の混乱のなかで窮乏状態にあったかつての恩師を救うべく外語魯語科の卒業生たちが募金して贈った住宅が仇となった

というのである。ただ結果はどうあれ、魯語科の卒業生たちが同窓会をその名も珊瑚壺会と名づけ永く旧師を偲んだことが今のわれわれにとってせめてもの救いである³³。

おわりに

以上のことから、わが国におけるロシア学がナロードニキによってもたらされたという私の仮説はある程度証されたのではなかろうか。鹿鳴館に象徴されるごとく、滑稽なまでに西欧化の道をひた走る当時の日本にあっては、ナロードニキ思想は受け入れられるべくもなかった。なぜなら彼らは近代の門口にあってはやくも近代を超越する思想を宣べ伝えようとしたのだから。だがたとえ国家レベルでは拒否されたにせよ、少数の魯語科の生徒たちは、それを生きる指針として受容れたのだった。なにも国家的人物となることだけが重要なのではない。あまりにも早く立身出世の無意味さを知り（あるいは教えられ）、余計者として生きる道を選んだわが先達たち（それ故にこそ歴史において忘却された）、彼らこそある意味で明治日本の矛盾を真に受けとめて生きた人たちだと私は言いたい。

同じことは、ロシアのナロードニキについても言える。誤解をおそれずに言えば、“ヴ・ナロード”の「挫折」によってナロードニキ運動は崩壊したのではなく、むしろその「挫折」から真のナロードニキ運動が始まったというのが私の持説である。シベリヤにおけるナロードニキ流刑囚の民俗学研究、アメリカでの神人共同体の試み、ヨーロッパのアナーキズム運動への参画、あるいはまたコレンコのような教育活動をつうじて彼らはより深い“ヴ・ナロード”を体験したのであろう。とまれ草創期外語魯語科の事例は、今日ロシア語教育にたずさわるわれわれにも多くのことを考えさせると言えよう。

注(1) 中村光夫『二葉亭四迷伝』、講談社文庫、44～55ページ参照。

(2) 中村光夫、前掲書、44ページ。

(3) ヨーロッパ近代そのものへの批判というより、その後進国への安易な移入の批判というべきかも知れない。

(4) メーチニコフの明治維新論にはこのことが明瞭に表われている。拙訳『亡命ロシア人の見た明治維新』、講談社学術文庫、を参照のこと。

(5) 小島倉太郎の経歴については、秋月俊幸氏の「小島倉太郎少年の魯語遍歴」、『窓』1979年3月号、38～45ページに詳しい。なおここで紹介するノートも、秋月氏が倉太郎の遺族から保管を委託されたものである。貴重な資料を快く見せて下さった秋

月氏に感謝する。なお倉太郎のノートは、これ以外に外語時代の作文や、開拓使時代の備忘録も含む。

- (6) ここで括弧でくくったものは、推定を意味する。ボゴモローフについては、ハリコフ大学でのメーチニコフの学生運動仲間に同名の人物がおり、外語での待遇がメーチニコフとほぼ同一なので亡命系に入れた。またコストゥイリョフは、『東京外国語学校沿革』の名簿ではカヌーフ・イリョフとなっているが、これは転記時の誤まり。長崎領事館から転出、後にペテルブルク大学日本語科の初代助教授として黒野義文とともに教鞭をとり、1889年に400ページにおよぶ『日本史』 *Очерк Истории Японии* を著し、それはメーチニコフの “L’empire Japonais” とならんで *Вл. Соловьёв* の論文『日本』の種本となる。但し外語時代の彼の授業態度がおざなりだったことは、倉太郎の作文の添削からも明らか。
- (7) この間の経緯については、『亡命ロシア人の見た明治維新』の訳者解説を参照のこと。
- (8) このことは、*А. Галактионов, П. Никандров “Русская философия XIX-XIX веков”* や “Социологическая мысль в России” под ред. *Б. Чагина* でも特別に一章を割当てられていることから分る。
- (9) 『資料御雇外国人』ユネスコ東アジア文化研究センター編、小学館による。
- (10) 同上書、319ページ。
- (11) *К. С. Карташева, «Дороги Льва Мечникова»* М., 1981. стр. 24. なお『日本滞在記』と訳した論文は原題を «Воспоминание о двухлетней службе в Японии» といい、「Русские Ведомости」紙に1883年から84年にかけて連載された。ただし筆者は未見である。
- (12) *См., Л. И. Мечников. «Цивилизация и Великие Исторические Реки»,* М., 1924. стр. 25.
- (13) 一橋大学図書館蔵（未整理）、なおこの発見は佐藤清郎氏のものである。*См. С. Сато «Мечников в Японии»,* Л. Н. т. 87, стр. 505-507.
- (14) See, *James D. White “Despotism and Anarchy: The Sociological Thought of L. I. Mechnikov” «The Slavonic and East European Review»,* 1976, No. 3, p. 410.
- (15) 拙稿、「ナロードニキと日本(2)ーメーチニコフの東洋文明観における日本の位置」、『ロシア語ロシア文学研究』、第12号、1980年、58~71ページ参照。
- (16) *Л. Мечников “Культурное значение демонизма”, «Дело»,* 1879, № 1-2.
- (17) «*Kolokol*» (No. 8-13) に連載されたこの論文 “*Les antagonistes de l’etat en Russie*” はメーチニコフの革命観を知る上で重要である。これはゲルツェンの同紙掲載論文 “*Etudes historiques sur les heros de 1825 et leurs prédécesseurs...*”

- と軌を一にしたもので、民衆蜂起の伝統をコサックや偽ドミートリイ、分離派などの歴史のなかに探ろうとするものだった。
- (18) Леонова, Дарья Михайловна の経歴についてはブロックハウス百科辞典の記述が簡にして要を得ている。
- (19) 前掲『資料御雇外国人』, 319ページ。
- (20) コレンコについては、レニングラードの東洋学研究所に出かずに子氏をとおして照会してみたがまったく不明とのこと。
- (21) «Деятели Революционного движения в России. Био-библиографический Словарь», т. 2, 1929. стр. 618.
- (22) 「哈爾賓日々」大正14年11月10日号につぎのようなコレンコの手紙が載った。少し長くなるが、引用する。「私は1876年(78年の誤まり一筆者)2月から1884年7月まで6ケ年と4月の間日本に居り愛する人々と語り談じました。富士山の崇高な姿や日光の幽翠や箱根の湯やそして長崎港の美しさなど今だに眼に見ゆるやうです……今ここに語学校教授の辞令と分袂の際学生とうつした写真を証拠としてそへましたから、日本語の辞令をロシア語に翻訳して私が6年間日本政府の役人をしてゐたといふことを証明して下さい。御願するわけは帰国後地主として税務署の役人として暮してゐましたが、その後革命やその他いろいろな悲運に見舞はれ、孤独な76才の老人としてソヴィエツト政府社会保険部から27年勤務の税務署役人時代の恩給月額16留をもらって暮しをたててゐるからです。こんな寒村にゐましてもランプ代や炭代にまで足りない始末です。それで御国で働いていた6年間の事を証明して下さいれば、その上8ルーブルとなりましてどうかかうか生活出来るのです」(『明治文化』第8巻第2号)原文は「ゴルキー張りの名文」だったという。大正14年(1925年)に76歳といえ、生年は1849年となろう。
- (23) 残念ながら私の手元には明治7年3月現在の生徒名簿しかないが、それによると仏語には薩摩出身者6名、独語には長州出身者13名、魯語には薩長出身者は0。
- (24) コレンコのロシア文学史講義については、『同志社外国文学研究』, 第37号に筆者の解説を添えて全文を復刻する予定である。
- (25) 『まがらみ草紙』第43号, 1ページ。ここで嵯峨の舎が、コレンコの名前と父称を取り違えているのは解せない。文部省、外務省の記録、およびコレンコ自身の手紙にもアンドレイとあるのだから、なお、中村光夫は、前掲書の写真説明の項で、アンドレ・コレンコと記している(344ページ)。なお「露国文学一斑」については総会発表後、早稲田大学(院)の沢田和彦氏より教示された。
- (26) 胡麻本篤一「中部地方におけるロシア語界の先達について」、『日本ロシア文学会中部支部会報』, №12, 8ページ。
- (27) そもそもがピーサレフとの出会いからロシア思想史の道に入った筆者にとって、

ポレヴォイがピーサレフの大学時代の親友であり、ストゥーニンがピーサレフの中学時代の文学教師として彼の文才を伸ばした人物だということは実に印象的である。

(28) コレンコがゴーゴリのユーモアを論じた部分を一例として引用しておく。“Юмором называется такое состояние души, в котором смех неразделимо сливается с грустным чувством сожаления о пустоте жизненных явлений и об уклонении человека от его нравственно-разумного значения. Юмористическими произведениями называются те, которые своими изображениями возбуждают смех и скорбь вместе. Гоголь охарактеризовал и свойство юмора вообще и свойство своего таланта в особенности, сказав, что ему определено озирать жизнь сквозь видимый миру смех, и незримые, не видимые ему слёзы……”

(29) 『二葉亭四迷全集』, 第5巻, 170ページ。

(30) 同上, 第5巻, 266ページ。

(31) 中村光夫, 前掲書, 44~55ページ参照。なお同書で中村も参考している大田黒重五郎(外語で二葉亭と同級)の回想には, コレンコの名があげられているのに, 本文で言及しなかったことは, たとえ語るに足る資料がなかったにしろ不親切である。

(32) グレイの外語雇入れは明治17年9月(『東京外国語学校沿革』, 昭和7年による), 魯語科はその1年後の18年9月に閉鎖, 東京商業学校(現一橋大学)に編入されており, この措置を不服とした二葉亭はこの時退学している。

(33) 『明治文化』第8巻, 第9号に寄せた上山草人の「コレンコ翁の最後」にはこうある。「コ翁は川上俊彦氏の計らひで当時の生徒たちの寄贈金を受けた上, 日本の教授奉職の証明で多少政府からの手当も増えたそうではありますが, 日本人と特殊な親しみを持った者は結局損で, コ翁も矢張り日本人の同情を受けたことが禍となって, 突然行方不明になったそうです。恐らくは老年とは云ひながら天命を全うしたものでなかろうとの話であります」(6ページ) 読むたびに悲しくも痛ましい話ではないか。コレンコ先生に合掌。

Русское отделение Токийского института иностранных языков и умственное влияние на него народников

Масадзи ВАТАНАБЭ

Известно, что в русском отделении Токийского института иностранных языков, основанного в 1873 г., занятия проводились на русском языке на

высоком научном уровне. Тем не менее, мы редко находим имена выпускников этого института в истории новой Японии. Одни видят причину этого в неспособности учеников, а другие—в самой цели основания русского отделения (т. е. подготовке переводчиков). Но дело обстоит не так просто. В предлагаемой статье автор старается доказать, опираясь на недавно найденные материалы, что главной причиной этого является общий критический дух, принесенный русскими преподавателями-народниками.

1. Две линии привлечения русских преподавателей к работе.

Первые русские преподаватели делятся на две группы: эмигранты и дипломаты из консульства. К первой группе относятся Л. Мечников, Богомолов, А. Коленко и Н. Грей, а ко второй—Трактенберг, Костылев и Данилович. Интересно, что и в записках лекции одного ученика Куратаро Кодзима ярко вырисовываются степени образованности и характеры преподавателей этих двух групп. Эмигранты занимались своей преподавательской работой с энтузиазмом и добросовестно, сообщая последнюю научную информацию, а дипломатов отличала банальность.

2. Лекция Мечникова о древней истории.

Лекция о древней истории, записанная в тетради Куратаро, по всей вероятности, принадлежит Мечникову, так как только он высказывал ту точку зрения на историю, которая впоследствии получила развитие в книге “Цивилизация и Великие Исторические Реки”. Он подчеркивает в этой лекции важность народного начала в истории и обращает большое внимание на народные верования и фольклор.

3. Первая лекция о русской литературе в Японии.

В архиве Куратаро сохраняются еще записки лекции о русской литературе, читаемой Андреем Коленко в 1879 г. Это была, несомненно, первая лекция о русской литературе в Японии. Она состоит из двух частей. В первой части, названной “Стихосложение” Коленко подробно объясняет строй русского стиха, и в качестве примера берет стихотворения Рылеева “Ай скучно же мне”, Давыдова “Богомолка”, Огарева “Кабак”, Одоевского “В Сибирь” и т. д. В Японии тогдашнего времени, стремившейся к заимствованию европейской цивилизации, ученики русского отделения, любившие декламировать такие стихи, были бы обречены на жизнь так наз. “лишних людей”. Вторая часть, освещающая историю русской литературы, подтверждает вышесказанное. В ней Коленко сердечно говорит о судьбе русской

литературы, в частности, о благородстве “лишних людей”, изображенных Пушкиным, Грибоедовым и Лермонтовым.

Из всего этого автор заключает, что именно ученики русского отделения, часто обвиняемые в неспособности и неблагодарности, оказались истинно верными своим учителям-народникам. И несмотря на то, что для истории их имена остались неизвестными, в их душах зрела резкая критика исторического процесса Японии после переворота Мэйдзи.